

# 一、放浪の俳人三頭火と篠栗

八十八ヶ所、第三十四番の葉師堂、このあたりの山と水は悪くない。途中、村の老人連の放蕩話は面白かった、……。

此の宿はよくない、お客さんは私一人だ、気分に読んだり書いたりすることが出来たのは勿怪の幸だったが。

## ◆山頭火日記

そこらの音ある水をたずねる  
秋風の石を祀りて拜んでいる

自由律俳人山頭火(禅宗出家得度、法名・耕畝)が、墨染の法衣・一笠・鉢・一杖・白い脚絆・地下足袋・強度の近眼鏡の雲水(遍歴修業の禅僧)の姿で、一所不在、乞食行脚(徒歩禅)に明け暮れていたころ、昭和五年十二月四日から五日にかけ篠栗町に一泊、七曲(新吉野公園)から篠栗町を東から西へ、家の軒先に立ち乞食(＝托鉢)しながら福岡市へと歩いていっています。その時のことを次のように日記にしています。

十二月四日晴、行程六里、汽車でも六里、笹栗町、新屋(三〇・下)・・濁酒一杯の元気で八木山峠を越える、そして七曲の紅葉谷へ下りる(笹栗新四国

別れの暈まで朝日さしこむ

別れともない猫がもつれる

また逢ふまでの霜をふみつゝ

霜の消えないうちに立つ

もういちど濃いお茶飲んで別れませう

二三歩ついてきてさようなら

ちつとも雲のない空仰ぎつゝ、別れた

廃坑の霜がぬくうとけてゆく

みんな活きてゆく音たてゝゐる

古い墓に新しい墓のかゞやかさ

朝日まぶしう枯山たかく

いたづらに真昼の火が燃えてゐる

曲つて旧道のしづけさをのぼる

耕す下を掘つてるか

これでも生活のお経あげてるのか

(最後の二句は冒頭に記載)

さみしいなーひとり好きだけど、ひとりになるとやつぱりさみしい、……。

『山頭火日記』(松山市立子規記念博物館蔵)より引用。

## ◆山頭火が見た篠栗

篠栗町の当時のありさまや優れた自然に、簡潔にふれています。

酒と水を好み、音を個人的にとらえ多様に表現する山頭火。無欲・無一物、自らを乞食坊主ともいう心やさしい自由律俳人。

冒頭の二句で、歩き疲れていても、かすかな渓谷の水滴かせゝらぎの音を聞きつけ、草木に分け入り、清水をすくい取り渴を癒したであろうことが伺えます。

そして、霊場か野の石佛に祈っている風景を見て、苦

のみの心の旅路、山頭火は何を感じたのでしょうか。

母の自殺・酒造業破産・一家離散・弟の自殺・離婚、数々の辛苦を重ね、母の位牌を背に、「旅にあけくれ、かれに触れ、これに触れて、うつりゆく心の影を写さう」と決め旅に出た山頭火が七十二年前、歩き・見た味わった水、そして綴った篠栗町の豊かな自然やさしい風俗は今も変わっていないようです。

## 参考資料

『山頭火日記』、『山頭火研究と資料』

※山頭火日記の原本は松山市立子規記念博物館に保存されています。篠栗町での日記の部分の複製は篠栗町歴史民俗資料室に展示しています。

篠栗町歴史民俗資料室